

村串仁三郎教授の退職をお祝いして

絵所, 秀紀 / エシヨ, ヒデキ / ESHO, Hideki

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / The Hosei University Economic Review

(巻 / Volume)

73

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

2

(発行年 / Year)

2006-03-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00017247>

村串仁三郎教授の退職を お祝いして

経済学部長

絵 所 秀 紀

村串仁三郎教授は1969年4月に本学経済学部特別助手として着任された後、1970年4月に助教授に、そして80年4月に教授に昇進され、今日を迎えるに至った。経済学部での教授期間は37年に及んだ。しかし、1954年4月に二部社会学部に学生として入学し、卒業された後、本学大学院社会科学研究科（経済学専攻）に進学され、本学から学士号、修士号、博士号を取得したわけであるので、学部入学時点から数えると実に51年（半世紀以上!）もの長きにわたって、法政大学とともに歩んでこられたことになる。文字通り、戦後法政大学の生き字引であった。

村串教授は、教育面でも、行政面でも、研究面でも、多くの足跡を残された。その独特のスタイルは良くも悪くも法政大学経済学部の一つの特徴を代表するものであった。

教育面では多くのゼミ生を育てられ、何人ものすぐれた研究者を輩出した。学生に対しては常に暖かい心で接され、学問だけでなく、人生のあり方に対しても大きな影響力を及ぼされた。とくに人間の「弱さ」について、教授は透徹した考えをもたれていた。

大学行政面では、常に経済学部の改革に意欲を燃やされ、学部長職をはじめとして、多くの困難な要職をこなされた。思えば、1984年の市ヶ谷キャンパスから多摩キャンパスへの移転に関しては中心的な存在であった。経済学部教授会が移転を決定した時、市ヶ谷キャンパスにはすさんだ学生

運動が吹き荒れ、大学の意志決定もきわめて困難な状況にあった。そうした状況下で、村串教授は、移転を決定した川上忠雄学部長の実質的な右腕として、辣腕をふるった。当時私は教授会副主任として学生との交渉にあっていたが、村串教授は常に近くに寄り添って、なえる私を支えてくださった。また、経済学部同窓会の立ち上げにも大きく尽力された。教授は、経済学部同窓会の生みの親であり、今日に至るまで実質的な最高顧問としての役割を果たされている。

研究面でも、多くの業績を残された。教授は多才な文筆活動を展開されたが、中心のテーマは労働組合論・労使関係論である。とくに、日本の炭鉱労働者（鉱夫）間で発達した友子制度の研究はきわめてすぐれた業績として、長く研究史に記録されることであろう。教授の研究歴とその特徴に関しては、本誌に収録された「人と学問：研究生活の回顧—村串仁三郎教授退職記念座談会—」をご覧いただきたい。その座談会の中で、教授はやや自虐的に自らを「劣等生」として理解しているが、その言に反して、筆が早かっただけでなく、次から次へと新しい問題を発見する能力に優れていた。とりわけ、欲望論、レジャー論、国立公園論（自然環境論）への着目は、特筆にあたいする。2006年1月10日におこなわれた最終講義でも「ジョン・ラスキンの経済学と労使関係論—『その最後の者にも』を読む—」という、きわめて意欲的かつパイオニア的なテーマを選ばれた。しかし、これまたいかにも教授らしく、十分に調理されていないラスキン論という印象を与える講義であった。が、おそらく教授の意図は、調理方法ではなく、むしろ素材の面白さを学生に伝えたいという点にあったのであろう。村串流教授法の特徴である。

最後に。村串教授は「仁三郎」という侠客のようなお名前を反映してか、義理人情にあつく、—しばしばあつすぎて「情に棹さして流される」ところがあった。法政大学経済学部の一時代を築いた教授が去られてしまうのはなんとも残念であるが、今後ともなおありあまるパイオニア精神を発揮しつつづけられるものと信じ、筆を置きたい。